

平成 24 年 9 月 7 日

鹿児島城（鶴丸城）“御樓門”復元に向けての検討会（産学官）設置の提言

鹿児島経済同友会
地域活性化委員会

鹿児島経済同友会地域活性化委員会では、下記に示す鹿児島城“御樓門”復元による効果・意義を踏まえ、その実現に向けて、民間企業、歴史・文化・建築等の専門家、鹿児島県、鹿児島市、各関係団体等による産学官連携の「鹿児島城“御樓門”復元検討委員会（仮称）」の設置を提言する。

鹿児島城（鶴丸城）は、1602 年（慶長 7 年）に島津家第 18 代当主・島津家久（初代薩摩藩主）が築いた平城である。「城をもって城とせず、人をもって城となす」という薩摩の精神に基づいて造られた天守閣を持たない質素な造りではあったが、築城以来、明治の廃藩置県が行われるまで、薩摩、大隅、日向の三州及び南西諸島の藩政の中心として、重要な役割を果たしてきた。

当時を物語る写真をみると、城山のふもとに本丸・二の丸を配し、本丸の大手門は御樓門で、北へ向かって 2 階建ての御兵具所櫓が続き、一方南の隅に単層の角櫓がある。とりわけ御樓門は、いかにも武の国・薩摩を象徴するような威風堂々のたたずまいである。城山を背景に建つ姿は、鹿児島の特徴的な風景を創り出し、城下町として発展してきた鹿児島にとって、まちの一つのシンボルであったと考えられる。

御樓門は、1873 年（明治 6 年）の火災で焼失したが、その勇壮な姿は今も写真に当時の面影を鮮明に伝えている。

社団法人鹿児島県建築士会が社会貢献活動の一環として取り組む鹿児島（鶴丸）城跡御樓門の復元的研究では、御樓門の支柱の幅が約 3 尺（91cm）と推定され、熊本城「南大手門」や佐賀城「鯨の門」を遥かに凌駕する大きさであったと報告されている。また、御樓門の柱間寸法の論理的な比例関係は、熊本城「南大手門」や佐賀城「鯨の門」などでは確認できず、鹿児島城「御樓門」が潔癖とも言えるほど周到に計画・設計された平面寸法体系で建設されていたことが明らかとなった。

鹿児島城“御樓門”の復元は、下記に示すような多くの波及効果が期待でき、地域活性化の観点からその意義は極めて高いと考えられる。加えて 2015 年には、第 30 回国民文化祭が鹿児島において開催され、そのシンボリック存在として 2015 年までの完成を目指すべきである。

①都市の品格向上

門という言葉は家の入口であり、象徴ともいえるものであるため、門下、一門など「家」そのものを指す言葉でもある。その意味から御樓門は薩摩の顔であり、郷土の歴史への強烈な自負と都市としての品格を高めることになる。

②回遊性の向上と歴史・文化ゾーンの充実

鹿児島中央駅からみて天文館の先に観光客にとって魅力的なスポットが整備されれば、鹿児島中央駅・天文館・御樓門の回遊性が高まる。鹿児島城跡が面する国道 10 号は、歴史と文化の道と鹿児島市が位置付けているが、今のところ西郷隆盛銅像以外に地域住民や観光客にとって魅力的なスポットは見当たらない。

③景観まちづくりへの寄与

鹿児島市の「城山周辺からウォーターフロントまでの景観まちづくり」を考える上で、鹿児島城の象徴的な建造物である御樓門復元は、鹿児島城跡一帯の整備促進につながる。

④歴史的建造物復元技術の継承

外壁に施された「なまこ壁」という壁塗りの技法や「入母屋づくり」の屋形形式など伝統技術の継承は、高齢化が進む技能者にとって、後継者育成の絶好の場となる。

⑤学習の場としての活用

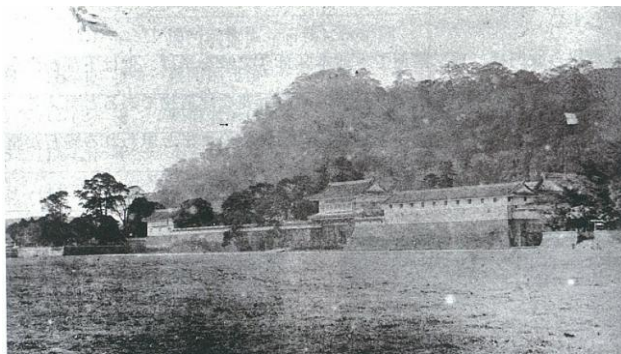
薩摩の歴史・文化や自然環境の資産を後世に残し、公開することで学習の場としても役立つ。

⑥新たな観光スポットの創造

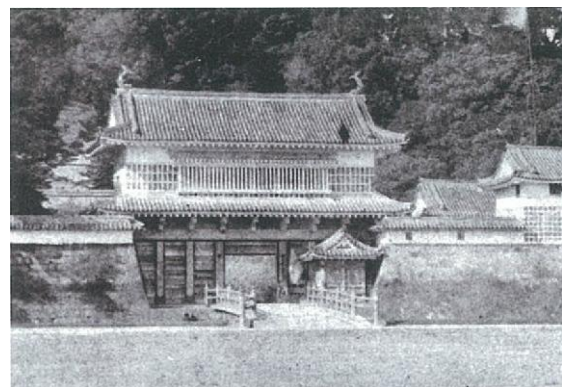
歴史遺産の復元により維新のまちとして、九州新幹線全線開業後の鹿児島の歴史資源を生かした新たな観光スポットの創造につながる。

⑦木材の地産地消の促進

県産木材の利用で、地産地消の促進にも貢献する。



鹿児島城（鶴丸城）



鹿児島城（鶴丸城）御樓門